



誰一人取り残さない福祉と 防災でつながる参加体験型 インクルーシブ防災活動



静岡県静岡市
西豊田学区地域支え合い体制づくり実行委員会 代表 江原 勝幸

1 活動の背景

災害時の高齢者や障がい者などの要配慮者は「自助」には制限があり、大規模災害では「公助」がすぐに機能しない中、地域住民が支援の手を差し伸べる「共助」が不可欠です。しかし、地域では高齢化・担い手不足や住民同士の関係性希薄化など、住民同士で支え合う力が弱まっています。どの地域でも人・資金・拠点・余裕がない地域課題があり要配慮者はわからないという。できない・やらない理由の前に立ち止まらず一貫して「小さな一歩でも踏み出す」「失敗こそが次につながる」をモットーに活動しています。

2 活動の内容

活動は毎年バージョンアップし、新しいことを常に取り入れています。地域住民と保健福祉専門職で構成される実行委員会は、当初から防災講座、防災訓練、避難所宿泊体験を組み合わせた実践訓練を柱に活動を進めてきました。ただ、実行委員・協力者はその活動に主体的に関わり充実感がある一方、参加者は客体的で指示がない限り動けないという課題が露呈しました。活動の主体は地域住民、目的は災害時に要配慮者への支援・配慮が機能するには平時からの関わり合える地域づくりに向け、体験型で参加者が主体的に取り組めるプログラムという現在の形に成長してきました。

コロナ禍で地域防災活動が中止又は規模縮小の中、「コロナ禍だからこそやるべきこと

がある」と3年間は感染症対応の避難所運営訓練を行い、コロナ5類移行後の令和5年度は避難運営を学ぶ事前研修（6月／参加者109人）、避難生活ワークショップ（10月／参加者52人）、停電想定の間「リアルHUG（避難所運営訓練・生活体験）」と避難所宿泊体験の実践訓練（12月／参加者172人）、訓練の検証と要配慮者支え合い支援を考察する福祉防災シンポジウム（3月／参加者140人）を実施しました。特に、リアルHUG夜バージョンでは、参加者が指示カードで行動する避難者役、要配慮者役、運営補助役にわかれて（参加者が選択、見学のみもあり）体験型の訓練を実施することができました。

3 活動の成果と課題

実行委員会の活動は外部からも評価されています。令和3年度は静岡県社会福祉協議会ふれあい基金「先駆的活動助成」採択と「ふじのくに共生社会大賞」優秀賞の受賞、令和4年度は日本地域福祉学会「第19回地域福祉優秀実践賞」に実行委員会のインクルーシブ防災活動が選ばれました。小学4年生社会科副読本や全国社会福祉協議会『月刊福祉』（令和4年11月号）にも取り上げられています。また、これまで多くの民間福祉財団の助成を受けてさらに発展した活動を展開しています。特に今年度は平常時にベンチ、災害時にかまどになる「防災かまどベンチ」を地域の多様な世代が参加して共につくる活動も進め、地域の指定避難所である小・中学校に1基ずつ設置することができました。



多世代が参加し、意見を出し合う避難所生活ワークショップ



実行委員と参加者が協力して段ボールヘッドの組立や福祉スペースを設置



運営会議を開き、住民が避難所各班リーダーとなり運営を担う



左は一般避難者スペース、右は要配慮者用受付と相談窓口を設けた福祉スペース

活動の大きな課題①学区内と課題②他地域への広がり。西豊田学区は静岡市内最大の人口（2万700人）・世帯数（1万800世帯）で26単位自治会があるため、学区全体に活動が浸透するにはまだ大きな壁があります。また、様々な地域から参加や視察もありますが、いかに他地域にこの要配慮者地域支援の仕組みづくりを広げるかも大きな課題です。

4 今後の活動

今年度はすでに事前研修やかまどベンチづくりを実施し、12月の実践訓練に向けた準備を進めています。どちらも作成したかまどベンチで炊き出しを行います。能登半島地震で要配慮者を支える地域が孤立し、福祉施設自体が破損・職員が被災するなど被災した要配慮者やその家族は非常に厳しい生活を強いられました。避難所では生活が難しい要配慮

者ですが、福祉避難所も開設できる状態ではなく、損壊した自宅や自主的な避難所で過ごすなくてはならない方々も少なくありません。この問題に対して共助でできることはないかという問題意識から、地域の公民館などで要配慮者を受け入れる「自主的福祉避難所」の仕組みづくりを来年度のテーマとして取り組んでいきます。



基礎づくり、レンガ積み、仕上げ作業を経て防災かまどベンチの完成